

してゐると思われる。

- (2) pidgin English: 英語の單語(又は語形)を、中國語式・マライ語式に並べ、混合した破格の通商用英語。
- (3) 古詩十九首の第十二首。後半は省略した。訓讀は、以下全て、鈴木虎雄氏の『玉臺新詠集』(岩波書店)に依る。
- (4) "Translations from the CHINESE" 1919, 47。
- (5) Francis T. Palgrave の "The Golden Treasury of Songs and Lyrics" 1861

同時代のイギリス詩のアンソロジー。

補

本書は、penguin classics にも收められてゐる。

(京都大學 畑山桂子)

葛雲文璇奎博士華甲紀念論文集刊行委員會

『葛雲文璇奎博士華甲紀念論文集』

韓國 全南大學校出版部 一九八五年 十一月

賀序三頁 文璇奎博士略歴五頁 目次二頁 本文七二三頁

跋三頁

選曆や古希の記念であれ退職の記念であれ、學者の學問上の成就を記念する形で編纂される論文集が一般にそうで

あるように、韓國の優れた中國文學者の文璇奎博士の選曆を記念して刊行されたこの論文集も、文博士の研究活動と何らかの關わりを持つ研究者らの論文を寄せ集めている。この論文集は、韓國の中國語文學會の一つ「中國人文科學研究會」の會長を努めておられる文璇奎博士の研究活動の幅廣さ、或いはその足跡を窺わせる。しかしながら、ここにこの論文集を紹介しようとするのはそのためではない。むしろ、この論文集は、今日の韓國の中國學の現況を瞭然と表している點で、われわれの注意を引くに足りる。韓國において「漢學」(もともと李氏朝鮮では漢語の學習を意味したが、日本でいう傳統的な中國學を指す意味としてこの言葉を借りれば)ではなく、現代的學問の一分野としての中國語文學の研究が體系的に行われ始めたのは、韓國の解放、即ち一九四五年の終戦以後である。といつても一九六〇年代までは國立ソウル大學校と成均館大學校に中國語文學科があったに過ぎず、一九七〇年代に入ってから漸く全國の大學校(即ち日本でいう大學)に同學科が汎く設けられることになる。現在は四十餘大學校に同學科があり、

韓國の中國語文學界は正しくその「成長期」に入ったと言
つてよい。

文璇奎博士は、一九四八年にソウル大學校の中國語文學
科を卒業、續けて同大學院に在籍されてから、朝鮮戰爭中
に戦火を避け地方で韓國語文學の講義を擔當なさることで、
教壇生活を始められた。以後中國語文學に關する研究とと
もに韓國漢文學の方面の著作活動も行われ、『韓國漢文
學史』（韓國 正音社、一九六二）のような韓國漢文學の
通史をも著しておられる。一九六九年には京都大學で、

『漢字音聲母論』の論稿をもって博士學位を取得された。

文璇奎博士が中國語文學とともに韓國漢文學をも修めてお
られることが反映されたかのごとく、この論文集によせら
れた三十三篇にのぼる論文は中國語文學と韓國漢文學の廣
い範圍に涉っている。その廣い範圍の論文を評者一人が分
析して見せるのは始めから無理であり、以下では、どのよ
うな主題が韓國の中國語文學界・漢文學界で論議されてい
るのかを紹介する意味で、われわれの關心を引く論文の内
容を要約するに留める。

○李慶善、「荷谷朝天記管見」は、萬曆二年の朝鮮派遣
の聖節使行で書狀官として燕京入りした許筠の紀行日記
『朝天記』を紹介したもの。『朝天記』には『明實錄』・
『明會典』の李王室關係の記事を訂正する問題をめぐって
行われた李朝と明の禮部との交渉の顛末が描かれており、
また、遼東の正學書院の生員と許筠との討論は、當時の明
における陽明學の盛況と李朝學人のそれに對する異端辯斥
とを對照的に見せる。

○張基權、「和陶飲酒二十首」に見える東坡と退溪の情
趣」は、陶淵明の「飲酒二十首」に擬らえた東坡の和詩と
李朝の退溪李滉の和詩とを比較したもの。論者は東坡の境
地を「飲酒悟道・虛心得閑・飲酒懷想」の三段階と捉え、
退溪の場合は求道精神に基づき「酒醉」より「理醉」を尊
んだという。この比較は、中國文學と朝鮮漢文學を、影
響・受容の側面ではなく文學思想の等位面に位置させてい
る點で興味深い。東坡は「小人輩や反對派との不和と爭議
に疲れた時に微醉して隱退の虛靜閑居をなつかしみ」、退
溪は「官職に止まらず慎重な態度で酔いながら隱居し獨り

其の身を善くしながら學問を振興して正道の社會を樹立しようとした」と、緒論において予期された結論が出されている。

○崔勝範、「ハングル翻譯『紅線傳』」は、唐代傳奇の『紅線傳』の翻譯物を紹介したものである。『殘唐五代史演義』等の翻譯物が朝鮮の創作物であるかのように論議されている今日、中國小説と朝鮮の翻譯物・創作物との關連を嚴密に分析する作業は朝鮮古典小説の研究において格別に要求されている。この論文は翻譯物の内容、従つて『紅線傳』そのものの内容を紹介することが中心となっている。

○俞昌均、「弁・辰韓國名の表記字音についての考察」は、魏志夷夷傳に見える弁・辰韓二十四國の名を中國字音の上古音の投影とみなし、その被轉寫音を推定したものである。弁・辰韓國の名に用いられた字音では、牙音系の「ㄱ」が見えず、有氣音が非辨別的であつたとされる。一方、「ㄱ」に當たる「勤」は「己栝」と同じ形態素「[k-]」の轉寫とされ、「者」は喉音系の「奚」と同じ形態素「[g-]」の轉寫とされ、「[k-]」／「[g-]」の對立が假定される。

これと並行して、「ㄷ」(塗・漬)は「d」の轉寫、「dz」(漕)は「[d-]」の轉寫とみなされる。また、「p」の例はないが、「p」は辨別的であつたとされる。従つて、子音の體系は「表二」のようになる。

【表二】

	g	k	t	ts
l	d	dz	(b)	p
n	s			
m	r	/		

母音については、一等(△)と三等の一部(▽)は介母による變種で外國語の轉寫には非辨別的であつたと前提され、核母「o, ɔ, ɛ, e」の五種に、核母と「[i-]・[w-]・[ɨ-]・[ɥ-]」の結合による「e」が加えられ、六種の基本母音が考えられる。高句麗の地名表記では、模韻は、「-ag<(-a)it>」(董同龢の説)の中間段階の「-ag」を指すと思われ、「-e」の表記に混用されている。

しかし、弁・辰韓國の名にみえる「塗・古・奴・鳥・路・戸・盧」は、しばらく、「eer」の轉寫としておく。弁・辰韓の母音體系は「表二」のように推定されている。

「表二」

／ e ̄ ̄ ö ()
a ̄ ̄ o ̄ ̄ u ̄ ̄
／ y ̄ ̄ — y ̄ ̄ は — ̄ ̄ ̄ ̄ の前にもみ現れる

○李敦柱、「漢字意味の辨別性と國語字釋の問題」は、現存する朝鮮最古の漢字釋訓書『訓蒙字會』（崔世珍、一五二七）の釋と下注を分析して、漢字の辨別的意味が朝鮮語の釋において埋没されてしまう混合同時現象を救うためにどのような辨別化が工夫されたかを検討した。①性別を記した例（雄曰虹、雌曰霓）②形状・性質を記した例（楊―揚起者、柳―下垂者）③大小によって區別した例（大曰國、小曰邦）④種類・位置を表した例（苑―植花木者、圍―域養禽獸處）等）が列擧されている。論者の指摘のごとく、「國・邦」の下注は周禮注（大

曰邦、小曰國）と合わず、「苑・圍」の下注は説文（「苑、所以養禽獸」と合わない。「楊・柳」の下注は根據が明らかでない。『訓蒙字會』の下注の根據を探る作業が課題として残る。

○孔在錫、「中國語聲調の起源問題」は、周代の語が既に聲調言語であったとみる「通説」に従いながら、表意文字の漢字が聲調を意味辨別資質として用いた経緯を推定した。聲調は韻尾の變化によるものではなく、音素として要請されたという。丁邦新の説（漢語聲調源於韻尾説之檢討）、一九八一）を紹介し、聲調論の方向轉換を求めている。

○金相姝、『孟子』の第三人稱代詞小考』は、『孟子』にみえる第三人稱代名詞の「之・其・彼」を用例別に羅列して頻度を数えたもの。起詞・止詞・詞組・領屬性加詞の詞品の用語、及び、敘事句・表態句・判斷句（準判斷句）・有無句の句法の用語は、呂叔湘の『中國文法要略』からの借用であろうが、論者はそれについて何も断らない。謂語の用語を述語と代えたのは、謂語の名稱が韓國中國學界に

通用されていないためである。

○趙起貞、「普通話聲母 / tɕ · tɕ' · tɕ'' · ɕ / の來源」は、 / tɕ · tɕ' · tɕ'' · ɕ / が『中原音韻』以前にいったん消滅し、『國音正考』の成立を前後として新しく出現し、それが普通話の聲母に合流した過程を概観したもの。王力・楊耐思の説に従いながら、『中華新韻』において / tɕ · tɕ' · tɕ'' · ɕ / の聲母を有する字が『中原音韻』ではどのような聲母であったかを検索している。『中華新韻』の該當字として『中原音韻』に見えない字を『廣韻』の反切から推定することは避ける。『中原音韻』の推定音は劉德智（『音註中原音韻』・楊耐思（『中原音韻音系』・陳新雄（『中原音韻概要』）の説に頼る。① / tɕ / は大體、『中原音韻』の聲母の / tɕ' / と / tɕ'' / より分化したもので、分化の條件は、介母音、もしくは主要母音が / ㄨ / か / y / である齶齒呼、或いは撮口呼の場合である、② / tɕ' / は大體、 / tɕ' / と / tɕ'' / より分化した、③ / ɕ / は / x / と / s / より分化したが、例外は、遜・巽（ / suən⁴ / > / ɕyn⁴ / ）のみである、と結論が出されている。

○丁一、「郭璞注の方言資料」は、『方言』・『山海經』・『穆天子傳』の郭璞注の中で方言を記したものを抽出した。方言の表記法や方言の分布様相については分析されていない。

○李在敦、「韻文における音聲考」は、詩語の輔音・元音・韻尾・聲調がもたらす語感について論じたもの。R. Wellek · A. Warren（『Theory of Literature』）、Wayne Schlepp（『San ch'ü 散曲』）と、黄永武（『中國詩學—鑑賞篇』）の説を整理している。同一の音が、それが用いられた詩行の雰囲気の違いによって異なる語感を表しうると指摘されているごとく、詩語の語感論は一般化されえない。また、漢語の韻律と聲調、平仄の要素が充分考慮されねばならないだろう。

○金學主、「小説史資料としての『書經』」は、先秦典籍の殆どが虚構性を含んでいるという前提から、『堯典』と『金縢』篇を神話の研究、或いは小説史の對象として用いる可能性を探索したもの。『堯典』については、羲和・洪水・舜の傳説が考察されたが、例えばその羲和の傳説と

『山海經』のそれとの差異が述べられてはいるものの、その差異の理由については分析されていない。白川靜の中國神話についての研究(『中國の神話』)から觸發された面があるが、白川靜氏のように神話の變遷・諸神話の階層化過程については注目されていない。

○金時俊、「賦・比・興考」は、歴代の賦・比・興論を時代順に整理した上、論者なりに、「賦」直説的な表現、比は事物の具體的な比喩、興は象徴をもって詩意を表す技法」と定義したものの。歴代の賦・比・興論は、①毛傳・鄭箋を追従する傳統派(孔穎達・陸德明・呂祖謙・陳啓源・陳奐)②劉勰、鍾嶸の一派(李仲蒙・王應麟)③鄭樵・朱熹を中心とする一派④清朝考證學派及び民國の學者(鄭樵・朱熹説の補完)の四つに分類されている。論者の賦・比・興の定義は通念に落ち着いた感があるが、歴代の詩經學の流れはよくまとめられている。論者は、マルセル・グラネや聞一多以降の民俗學的方法(例えば、松本雅明・白川靜諸氏の研究)の詩經研究において賦・比・興の概念がどのように定義されているかについては注意を拂わない。

○范善均、「招魂篇の作者と被招者」は、楚辭招魂篇の作者を屈原、被招者を楚懷王とみなす説に従い作品の内容を分析したもの。吳汝綸(『古文辭類纂校勘記』)・劉大杰(『中國文學發展史』)・鄭振鐸(『中國俗文學史』)・王宗樂(『屈原與屈賦』、臺灣、一九七四)の説を取る。

○河正玉、「鏡花縁の主題と内容」は、『鏡花縁』を李汝珍の「發憤の作」とみなし、その主題と内容を「反清抗暴の民族意識」に求めたもの。李辰冬(『鏡花縁の價值』、世界書局『鏡花縁』巻頭)の説を取る。

○殷茂一、「阮籍の時代と行爲についての小考」は、主に晉書阮籍傳を中心として、阮籍の生涯を描いてみたもの。

○李東郷、「姜夔の詞風と作品の賞析」は、姜夔の詞風についての従来の評價を整理して、それを踏まえて「揚州慢」・「點絳脣」・「暗香」の三篇を鑑賞したもの。論者は、姜夔の詞語に「幽・清・冷・寒・暗」の字が多く用いられたことを理由に、彼の詞風を「清勁騷雅」と名づく。特定の詞語の頻度をもって詞風を論じるには、内容についてのより緻密な分析が伴われねばならないだろう。それらの詞

語が南宋詞一般に多く見られるものであるかどうかについても検証が要求される。

○洪寅杓、「韓柳の史官の是非を論ず」は、韓愈の「答劉秀才論史書」と柳宗元の「與韓愈論史官書」を對象として、韓愈と柳宗元の史官論を對比したものである。一九五〇年代末—六〇年代初の中國において交わされた「韓愈—唯心論者、柳宗元—唯物論者」の論難が踏まえられ、韓愈の文の論理的缺點が指摘されている。

○柳晟俊、「許渾詩試考」は、唐の許渾の詩をその詩風の面において分析したものである。許渾の詩風は、抒情面の別離・友誼・虚無、絃景面の豪麗・幽玄・詠物の項目に分類され、「清新工奇之要」と「以情爲主、以意爲副」の特色が論じられている。抒情面と絃景面のそれぞれの項目は互いに重複する所、或いは概念が明瞭でない要素もあるが、『全唐詩』に多くの作が収録されているながらもそれほど注目されていないなかった許渾の詩を唐詩史の中で正當に評價しようとする論者の意欲が見える。『丁卯集』の五種の版本について言及しながら、杜牧などの他人の詩が混入されているこ

とが指摘されているが、テキストの校勘は行われていない。漢文で書かれている。

○金周淳、「陶淵明詩文の淵源と作品考」は、陶淵明の詩文の來源を國風・楚辭・樂府・古詩十九首などに求め、その語句の借用の例と、それらの表現様式に共通するとされる疊語の用例を調べたものである。陶淵明の主要な詩文について、その内容と既往の論評を紹介している。

○林貞玉、「唐詩の内容と特質考」は、唐詩の發展の過程を概観し、唐詩一般に共通する特質を論じたものである。唐詩の内容としては、自然山水の禮讚、崇高たる愛國心、邊塞生活の歌唱の三つが、またその特色としては、詩意の優れた發想、詩語の含蓄と譬喩、言語の精練、音樂性の四つが挙げられている。

○朴信長、『禮記』淺考」は、儀則(本體面)・治事(效用面)・實踐(行動面)をもって「禮」を定義した上、『禮記』の成立とその篇目及び内容を概観したものである。

○徐義永、「左聯の成立と活動小考」は、一九三〇年代の中國左翼作家聯盟の成立経緯とその活動について概観し

たもの。創造社・太陽社の革命文學の提唱が、各文人の內面的思想において解剖されるよりも、共產黨の策動によるものとして記されている。

○梁會錫、「康海の『汧東樂府』考」は、明代の散曲を再評價する作業の一環として、まず康海の『汧東樂府』の形成と内容について概観したもの。論者は康海の散曲の特色を、南曲の北曲化、修辭技巧と言語驅使、豪放の詞風に求めている。修辭技巧の對仗||對句形式を、朱權『太和正音譜』の分類に従って分析した部分は参考にすべき所がある。

○魏幸復、「清末小説理論淺考」は、『新小説』の創刊と『小説林』の創刊とを分岐點として清末における小説理論の變化様相を検討したもの。「昕夕閑談小序」(蠡勺居士)より「譯印政治小説序」(梁啓超)に至る時期は清末の小説理論の萌芽期で、『新小説』の創刊以後は小説の社會的意義が多様に評價され政治性の強い理論が展開された時期であり、『小説林』の創刊以後は小説の社會的效用が客觀的に評價され始めた時期であると、論者はまとめる。

○申闡錫、「東坡の豪放風格詞小考」は、「豪放」の概念を、雄渾な氣象、超然と空幻、表現の自由をもって定義し、東坡の「豪放」な詞風の作品二十八首をその定義の各項目に従い分類して内容を分析したもの。形式面の表現の自由という項目以外はその定義の項目互いに交錯する所がある。形式上の特色については、詩・詞・賦の形式の活用、隱括・集古・回文詞、及び句法の變革、題序の活用、等が注目され、「念奴嬌(大江東去)」と「水龍吟(古來雲海茫茫)」が具體的に分析されている。

○張南姬、「李義山の『錦瑟』考」は、「錦瑟」について従来の解釋を擧げて論評を加えた上、作品そのものの象徴性と藝術美を分析しようとしたもの。「錦瑟」を悼亡・自傷・自序・艷體・詠物・傷國の詩とみる従来の解釋のいずれにも賛成せず、論者はその作品を義山の「生涯の總合物」とみる。例えば、「錦瑟五十絃」を、太帝傳説を借りた「悲情」の象徴とみなす。詩人の意識が超現實主義的なものとして解されているが、「錦瑟」は「情を主線にした人生懷古詩で、傳記的要素を副線にしている」という結論

とは多少ずれがあるように思われる。

○姜信雄、「論語的人間と顔氏家訓」は、『顔氏家訓』を、「論語的」人間を養成することを目的とした著作であるとして規定した上、その内容を紹介したもの。「論語的」人間とは儒教的實踐の人間を指す。論者は中國學において「家訓學」を定立することを提唱しているが、『顔氏家訓』の成立とその版本のことや顔之推の生涯についても記述している。宇都宮清吉の説が多く引かれている。

○金在乗、「白詩評論小考」は、白居易の詩についての歴代の評語の中から、詩風に關するもののみを選んで、時代別に並べて説明を加えたもの。

以上、『文璇奎博士華甲紀念論文集』の諸論文の中から、中國語文學、或いは朝鮮漢文學に關するものを選び、主にその内容を概観することに務めた。各論文に見える研究方法と論文構成法は一定ならず、また、この論文集一冊で韓國の中國學（漢文學）の現況が全部把握されるとは言えないだろう。しかしながら、「成長期」を迎えた韓國の中國

語文學界で、①作品、或いは資料に對するより嚴密な分析が次第に重要視されていくこと、②臺灣での研究成果が依然として多く参照されながらも、中國大陸や日本での研究成果について關心が高まっていくことが、この論文集を通じて容易に感じ取られる。

（韓國ソウル大學校講師 沈慶昊）